



太陽の塔

森見 登美彦 新潮社



京大の院生が日本ファンタジーノベル大賞を受賞したと聞いて、私はすぐルネに走り、この本を手に入れた。帯には「現役京大生の超新星現る！」という文字が躍っている。この賞はファンタジーというジャンルを広くとらえていて、過去の受賞作も歴史小説に近いものから冒険小説のようなものまで幅広い。その賞の選考で、この作品はそもそも「ファンタジー小説かどうか」という点を問題にされたという。どんな奇想天外な小説かと思って読んでみると、それは京大生的な、余りに京大生的な作品だった。

主人公は農学部5回生（休学中）。作者本人がモデルとなっているのだろうか。志賀越道を少し登ったところに住んでい

て、東大路通りにある寿司屋のバイトと近所の古本屋めぐりで日々を過ごしている。日本中を恋愛礼賛主義で覆う悪しきクリスマスファシズムと鴨川に等間隔に並ぶ男女を何より忌み嫌う、どこにでもいそうな男子京大生である。

そんな主人公の一人称を借りた作者の言葉は非常にひねくれている。奇妙な方向に膨らんでいく想像力。叡山電車や太陽の塔をめぐる展開する妄想の数々。彼のひねくれた言動とマニアックな知識が、読む側の京大生魂を刺激してやまない。この小説は本当に京大生以外の人間に受け入れられるのかと疑ってしまうほ

どだ。

京大生の日常が小説になっているというだけでも十分に面白いのだが、それだけでは終わらない。女性との付き合いに不器用な主人公と仲間たちが、表面上は『恋愛』の2文字を拒否しながらも異性との付き合い方を模索していく姿は、こんな風に書かれるとまじめくさっているようだが、実に笑える。それも作者独特のユーモアあふれる文体によるところが大きいのだろう。

読み始めると、止まらなくなること間違いなし。そんな勢いを感じさせる一冊である。（ピカイチ）

がんばれ!!

ばいとくん

第64回 実験補助バイト



今回ばいとくんがやって来たのは『DNA実験室』。実験補助のバイトである。

実験室に通されたばいとくんを待ち受けていた仕事は、院生の手伝いだった。彼が取り組んでいる課題は、なんとかという蛾の脳内にある、なんとかという光に反応するタンパク質を特定すること。参考文献ということで英語の論文が手渡された。何だか難しい。試験管洗い程度の仕事を予想していたばいとくんは、「話が違うじゃん」と思ったが、未知なる世界への挑戦に心躍ったのだった。

まず蛾の脳をすりつぶすことから始まった。慣れないばいとくんは試験管を持

つ手も危うい。いきなり机に手をぶつけてしまった。飛び散る脳。なんと10個あるはずの脳が試験管内にたった3個しかない。よく見ると、机に4個、右手に3個くっついていて、院生の目を盗んで脳を試験管に戻すばいとくん。情けない。

見よう見まねで仕事をしていたばいとくんであったが、果たして手伝いになっているのだろうか、単なる足手まといになっているだけじゃないか、そもそもこんな仕事を素人の僕に任せていいのか…。などと、疑問を抱きつつ1日目が終了した。

2日目。実験結果が出る予定だったので、前日の疑問も失敗も忘れてウキウキ

なばいとくん。器具の扱いにも慣れ、スムーズに実験が進んでいく。しかし、出てきた結果は予想とは全く逆の、あり得ないものだった。院生と顔を見合わせるばいとくん。これには教授も首を傾げるばかりであった。

「自分のせいだ…」

ひどく責任を感じたばいとくん。思い切って初日からの疑問を教授にうち明けてみた。

「僕、手伝いになってませんよね…。僕にやらせていいんですか？」

「教育だから、教育。ははは」

教授のありがたいお言葉に、ばいとくんは感謝するばかりであった。（apis）

はみだし
すてーじ

研究室でらいふすてーじを読んでいると暇人扱いされて困る…
⇒らいふすてーじを作っていると暇人扱いされて困る…

(E・4 ピクミン)
(同情な編)